



TITLE:

<特別寄稿>刊行の費用をめぐって (第20号記念特集)

AUTHOR(S):

片岡, 宜行

CITATION:

片岡, 宜行. <特別寄稿>刊行の費用をめぐって(第20号記念特集). 研究報告 2006, 20: xi-xii

ISSUE DATE:

2006-11

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/134477>

RIGHT:

刊行の費用をめぐって

片岡 宜行

『研究報告』が第20号の刊行を迎えると聞き、以前わずかながら本誌に関わった者として大きな喜びを感じております。とはいえ、私自身は『研究報告』にわずかに二本しか論文を書いておらず、それも今にもまして未熟だったころのもので、質の面ではまったく貢献していません。自分と『研究報告』の関わりについて思い出すなら、掲載していただいた論文よりも、本誌の運営に関わった経験の方が深く印象に残っています。

私が『研究報告』の運営に関わっていた1998年から翌年にかけて取り組んでいたのは、刊行にかかる費用の削減でした。『研究報告』では大学院生を中心とする執筆陣が正会員を構成し、正会員を引退した人たちが賛助会員となって会を支援するという仕組みになっています。私が正会員になったころ、正会員の会費は一冊刊行するごとに一万八千円で、当時は執筆権のない修士課程の学生にも同額の負担が求められていました。またそれに加えて論文の執筆者は一ページの執筆につき千円ずつを負担することになっており（これは現在でもそうです）、さらにティーチング・アシスタントの給与を出し合うなどして費用を賄っていました。就職が困難な状況の中、正会員にとどまる期間は長期化し、経済的な負担を軽減することが必要でした。

当時はフロッピーで業者に入稿していたのですが、私たちはそのころ研究室で購入したパソコンを使い、版下を自分たちで作成することにしました。書式の決定や表紙の作成などの煩わしい作業は、コンピューターに詳しい先輩の片桐智明さんがすべて担当してくださいました。こうして出来上がったのが第12号（1999年）です。その前年に刊行した第11号と並べてみてもまったく違和感を覚えないくらいに、第12号はそれまでの体裁を忠実に再現していますが、これはひとえに片桐さんのご尽力によるものです。この版下の自主作成によって、フロッピーで入稿していたころに比べ、経費を大幅に節減することができました。

こうして会員の負担軽減に取り組んだのですが、その中では大きな失敗もありました。私は、このとき正会員の会費を廃止しようとしていました。正会員に長くにとどまる人に対して、論文を執筆しないときにも毎回会費の負担を求めるのは酷であり、一ページあたり千円の執筆者負担金で主に出費を賄おうというのが私の考えでした。また、論文を執筆する者、つまり論文を公表する権利を得る「受益者」が主に経費を負担すればよいという考えもありました。しかし、これはもちろん大きな間違いでした。正会員が会費を負担しないというのでは、会としての体をなさないの

は当然でしょう。また、同時に賛助会員の会費も一口二千五百円から千円に減額したのですが、正会員の会費を廃止したのに賛助会員に負担を求めるのもおかしい話です（実際には論文を執筆しない正会員には賛助会員と同等の負担を求めてはいましたが）。結局、一度は決定していたこの「正会員会費の廃止」は、まもなく撤回することになり、私は前号にさかのぼって先輩たちから会費を徴収して回るという、何ともやりにくい後始末をすることになったのでした。

現在、正会員の会費は一冊刊行するごとに五千円となっていますが、この額はこのときに決めたものです。このとき、会費の額をどのように設定すべきかですぐにぐん迷いました。なにしろ正会員の会費を廃止しようとしていたくらいですから、会費がゼロでもどうにかやっていける見通しはあったのです。そうなるとかえって「適正な額」を決めるのが難しく感じられました。「一年に一度払えばよいのだから」と、一万円にしようという声もありました。しかし、正会員の負担をできるだけ抑えたかった私は三千円にするよう主張しました。結局、両者の間できりのよい数字ということで五千円に決まったのです。現行の会費の額はそのような形で決まったものにすぎません。現役の正会員の皆さん、あるいは将来正会員となる皆さんには、私たちの取り決めをどんどん見直していったほしいものです。

それにしても賛助会員の制度は素晴らしいものだと感じます。年月を経るにつれて賛助会員は増えていくことになり、後輩たちの論文発表を広く浅く安定的に支援する仕組みとしていつまでも機能するからです。いつの日か、もっと少ない負担で論文を発表できるようになるかもしれません。

こうしてみると何か私はお金のことばかりにこだわっていたようですが、会の運営を通してお金で買えない経験を積ませていただいたことはもちろんです。最近の『研究報告』は私たちのころよりもはるかに分厚くなり、その充実ぶりには驚かされます。これからもどんどん新しいアイデアを取り入れ、また読者の皆様のお力添えをいただいて、いっそう魅力的な論文発表の場になることを願っております。

〔福岡大学人文学部専任講師〕